

2009年12月15日 発行

市史だより

F u k u o k a

10

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Autumn/Winter 2009

TAKE FREE

特集

「水と緑の里」 脇山～背振

連載コラム「歴史万華鏡」／連載コラム「福岡市史への歩み」

部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）

編集／発行

福岡市博物館
市史編さん室

福岡市は、都市としての姿だけではなく、山・海などさまざまな景色を持っています。とりわけ佐賀県に接する背振山から早良平野につながる一帯は、豊かな自然を残しており、その四季折々の変化は市民の目を楽しませてくれます。今回は、この一帯の歴史を少しだけのぞいてみましょう。

脇山 ― 山麓の歴史 ―

博多湾（福岡湾）から、室見川をさかのぼること南へ約一〇キロ、小笠木川の合流点からさらに南へ上つていくと、背振山・金山・西山・荒平山・油山などの山々とそれらを結ぶ稜線に囲まれた美しい田園風景が広がります。この一帯は、江戸時代中頃の福岡藩の儒学者貝原益軒が編纂した『筑前国統風土記』（以下『統風土記』）では、椎原・板屋・小笠木・西村（現在の西）・脇山・内野・石竈（現在の石釜）・曲淵（現在の曲淵）の八カ村をまとめて、「脇山郷」と呼んでいます。

現在我々が見ることが出来る中央部一帯の農地は、一九八〇年代以降の土地改

良事業によるもので、原風景そのままという訳にはいきませんが、山際では、昔ながらの棚田を見ることが出来ます。さて、この土地改良事業に伴って行われた発掘調査では、おだやかな風景とは裏腹に、いくどとなく水害・土石流によって被害を受けてきた痕跡が見つかりました。しかし人々は時を経て災害跡地を再活用します。その様子は、生活痕跡として見つかりました。旧石器・縄文時代の土器や落とし穴・鏃（狩猟道具の一部）、古代の製鉄遺構や関連遺物、中世の生活跡・炭焼き跡・焼土坑などです。古来より炭焼きや製鉄は、木材調達や水の便から、山間部で行われていました。山の麓は、縄文時代以前では狩猟を中心とした自然共存の場として、中世や古代では産業の場として好立地であったといえます。

ところで、このあたりでは、弥生時代・古墳時代のものがほとんど見つかっていません。脇山の北側にある松木田遺跡（早良三丁目近辺）では、縄文時代の土石流の上に弥生時代・古墳時

代の集落が見つかりました。また、周辺でも同時代の生活痕跡が認められますが、今のところ見つかったいる当時の居住域はこのあたりまで。人々は南の地に生活や産業の場を求めなかったようです。

松木田遺跡の南、旧脇山郷の入り口にあたる大坪遺跡・大坪南遺跡（旭が丘団地近辺）では八世紀の生活痕跡や製鉄関連遺物（鉄滓・鞆の羽口・取鍋）が見つかりました。狩猟中心の縄文時代以来、人の関与が薄くなっていった地域ですが、古代の製鉄産業をきっかけに、再び営みが始まり、やがては集落や耕地に発展した様子がうかがえます。



▲上広瀬遺跡で見つかった落とし穴（写真提供：福岡市埋蔵文化財センター）

交通アクセス

- ① 花乱の滝
【車】福岡都市高速5号線野芥出口から国道263号線を曲淵方面へ約30分。西鉄バス「水源池前」停留所手前を左折。
- ② 横山神社
【西鉄バス】「城の原」停留所下車、徒歩約5分。
※駐車場はありませんので、お出かけの際は公共交通機関をご利用ください。
- ③ 背振山頂（弁財天）
【車】福岡都市高速5号線多目出口から国道385号線を経由し、県道136号線を板屋方面へ約1時間20分。板屋公園を右折後、すぐ左折。

※山道は未舗装の箇所もあり、天候によっては危険です。特に冬場は積雪・道路の凍結等にご注意ください。



1



2



3

1 内野原田遺跡で見つかった古代の製鉄炉（写真提供：福岡市教育委員会文化財部） 2 『筑前名所図会』に描かれた花乱の滝（福岡市博物館蔵） 3 現在の花乱の滝

修験の山、背振

「脇山郷」の西の一角、早良区石釜と曲淵の境を流れる滝川の中流に、「花乱の滝」と呼ばれる滝があります。十数メートルの高さのある滝で、勢いよくなだれ落ちる水と白く散る飛沫が美しく、福岡市の名勝のひとつといえます。

滝の名の由来は定かではありませんが、飛沫が乱舞する花びらのように見えるからだとも、昔ここで火乱という山伏が修行したからだともいわれています。『統風土記』には、「里人のいはく、昔火乱と云山伏、剣術の上手にて、魔法を行ひしか、此滝にうたれ修行せし故に名付くとなむ」と記されています。川沿いの山道から花乱の滝へと下りる小径には、不動明王の祠がたまたずんでおり、なるほどこの滝がかつては山伏の修行場であった気配をうかがわせます。

その花乱の滝をすぎ、山道をさらに登っていくと、金山（標高九六七メートル）へと続く登山道に入ります。金山は早良区と佐賀市三瀬村の境にあり、背振山地の一峰として、背振雷山県立自然公園のなかでもひととき目立つ山です。その金山から、尾根に沿っ

清流と緑豊かな土地の、今昔物語。

「水と緑の里」脇山～背振

特集

た自然歩道をいくこと数時間、背振山が見えてきます。

背振山は標高約一〇五メートルで、頂上からは、北は福岡平野から玄界灘、南は佐賀平野と有明海などが一望できます。山岳信仰、修験の山としても知られ、古くは平安時代に花山法皇や藤原道長が帰依した高僧、性空が修行した場所としても有名です。

中世には、頂上付近にあった天台宗の東門寺（上宮）が、筑前・肥前の両側にまたがる広大な信仰と修行の場を管理し、山中には「背振千坊」と呼ばれる修験者や僧侶の住居である坊舎が数多くあり、さらに下の山間部や平野には、先に紹介した脇山郷などを含んだ数多くの寺領を持つていました。しかし、延徳元（一四八九）年の火災などを期に、東門寺は荒廃しはじめ、その寺領も徐々に武士勢力などの手に渡っていき、筑前側ではわずかに残った寺領も文禄四（一五九五）年、豊臣秀吉の甥で筑前の大名となった小早川秀秋の時に没収されたため、ついに寺の再建はなりません。一方肥前側では、江戸時代にも佐賀藩主鍋島氏により、靈仙寺（中宮）に寺領が寄進され、しかも山頂には弁財天（上宮）が祀られました。このことは、後に起こる

しかも、正保四（一六四七）年に幕府に提出した肥前国絵図に、弁財天の位置を自分の領地としてきちんと記載していたことです。一方、福岡藩から同時に出された筑前国絵図には、弁財天はもとより背振山の記載さえなかったのです。実際の正保の筑前国絵図の控を見ると、志賀島の姿（本誌9号表紙）や背振山地の国境線⁴なども、まだまだ当時の、地理や地誌に関する大ざっぱな意識で描かれており、この点は福岡藩も『家譜』のなかで役人の不手際であると反省しています。ただし『統風土記』によると、この正保図作成で幕府は大名に道路の遠近、海川の深浅などの軍事、交通上のデータ記載を最重視させており、それに忠実な福岡藩からすれば、五十年後に「想定外」で使われてしまった、ともいえます。

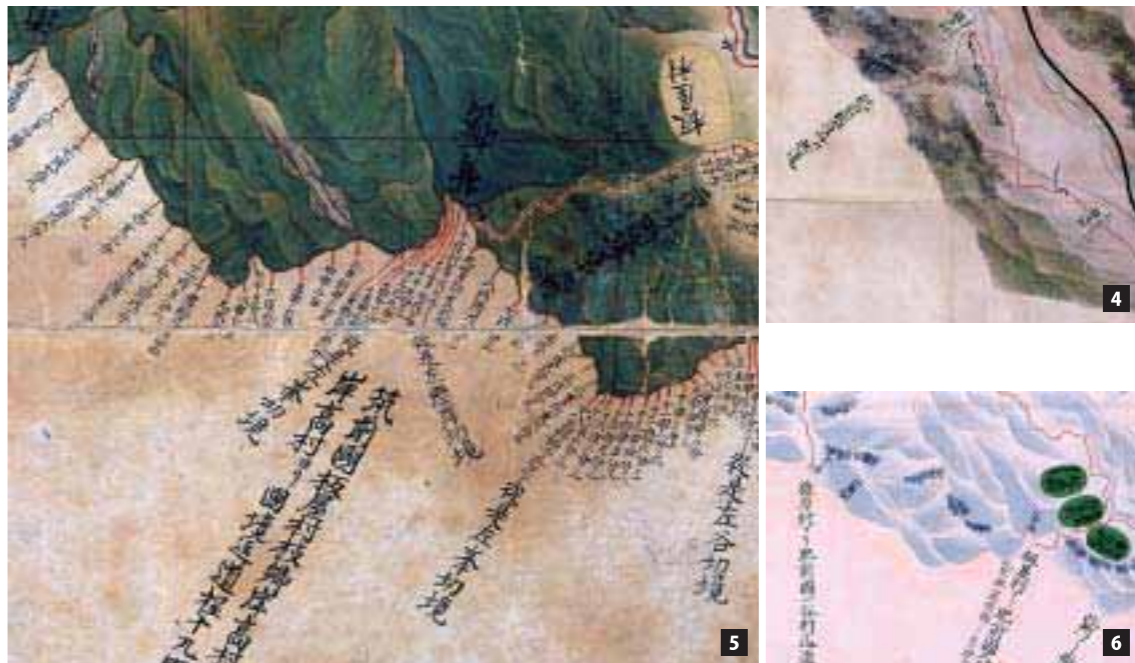
この事件の後、元禄九年に諸大名は幕府から再度国絵図作成を命じられました。福岡藩は地理学者や絵図方を総動員して、まず国絵図の下絵である「御国分間絵図」⁵を作成し、次にその結果を新しい筑前の「御国絵図」⁶のようにまとめ、幕府に提出しました。この絵図は正保国絵図と比べてみると、島の形や国境の線引きなどにおいて格段に統一性と正確さが増しており、元禄時代に幕府が求めた新国絵図の姿が分かります。そして「御国分間絵図」における国境上の測量点の多さからは、国境争いに敗れた福岡藩の正確な図示に対する関心の高さが見て取れるようです。

空の見張り番

背振山は北部九州の海や陸の交通の目印として、その重要な位置故に、航空が飛躍的に発達した第二次大戦末期の福岡大空襲では麓の内野地区にも被害が出るなど、不幸な歴史もありました。現在は、山頂に自衛隊のレーダードームがあり、その近く（佐賀県側）には気象レーダーも置かれ、福岡市域の目として日常生活にも大きな役割を担っています。



◀「筑前名所図会」に描かれた背振山（福岡市博物館蔵）



4 正保の筑前国絵図より 5 御国分間絵図より 6 御国絵図より（すべて福岡市博物館蔵）

筑前・肥前の国境争論に大きく影響しています。

裁定の決め手は「国絵図」

現在、福岡県と佐賀県は背振山地の峰々を県境としていますが、その確定は江戸時代、天和三（一六八三）年〜元禄六（一六九三）年の一〇年間におよぶ国境争論の結果なのです。

筑前国の早良郡板屋・脇山・椎原の三カ村と肥前国神崎郡久保山村との間で国境争論が起りました。背振山頂の弁財天宮より南側の二重平にかけての土地が、筑前・肥前どちらの領地であるのかをめぐっての争いです。領民間の話し合いに始まり、やがて両国間の折衝へと発展しましたが折り合いはつかず、その裁定は幕府に委ねられました。幕府は二名の検使を背振山へ派遣して検分を行い、さらに江戸へ両国の領民を呼んでそれぞれの言い分を聞きます。そして協議の結果、幕府は筑前側敗訴の裁定を下したのです。

筑前・福岡藩側の敗訴の理由は、福岡藩の歴史書である『黒田新統家譜』（以下、『家譜』）によると、いくつかあったようですがその大きな根拠となったのが、背振山頂の弁財天を、佐賀藩が造営や修理を行い寺領を寄進していること、



■写真【上】：龜山上聖像（絵葉書「福岡名勝」：福岡市博物館蔵）
■写真【下】：東公園入口の風景（絵葉書「福岡名勝」：福岡市博物館蔵）

福岡市博多区の東公園は、古くはその一帯が箱崎松原、千代松原と呼ばれた博多湾の広大な松原の地です。古くから笠崎宮の神木の松の林として大切にされ、室町時代の連歌師宗祇も旅行記でその美しさを称えた名所でした。天正十五（一五八七）年の豊臣秀吉の九州出兵では博多商人も招かれた千利休の茶会が催されており、江戸時代には福岡藩に保護されています。

明治九（一八七六）年になり、松原の一部の約二〇ヘクタールの土地が公園地に指定されて、同十二年に東松原公園と称された後、同三十三年に県営東公園となり、同三十七年には今も公園のシンボルとなっている元寇ゆかりの亀山上皇と日蓮の巨大銅像が建立されました。その後、大正中期に松原が害虫の大被害を受けたため整備が始まり、昭和八（一九三三）年には動物園も開園（戦争のため同十九年閉園）、戦後は昭和三十一年に各種競技設備の揃った面積二倍の運動公園に発展しました。現在は昭和五十六年に県庁が移って来たことで再整備され、季節の花や緑の多い憩いの場になっています。

東公園の今昔

～松林と歴史の名所から、緑の憩いの場～

東京大学史料編纂所に協力をお願いし、これまで活字化されていない史料から、資料編に掲載する史料を検出しています。

すぐには閲覧できない遠方の史料も、多数の影写本・謄写本・写真帳などを架蔵している同所に検出をお願いすることで、より正確で効率的な作業が可能になりました。

現在、古記録の良質な写本や石清水八幡宮記録などから関係史料のリスト化が進んでおり、新たな史料の検出も期待されます。

古代

『資料編 考古3』では、江藤正澄をはじめとする先人の記録や、福岡市教育委員会以外で保管されている福岡市出土の考古遺物に注目していきます。

考古

日本で考古学が学問として認知され始めた明治頃、福岡を中心に活動した文化人がいます。江藤正澄、「絵を好み書を習ふことを耽み、……と自ら言う」とおり、彼が遺した書物には、繊細な資料描写や景色のスケッチ、国学の素養を活かした解説、資料の由来や発見の経緯などが、丁寧に記されています。その中には福岡市ゆかりの考古遺物に関するものもありました。

資料調査と並行しながら『資料編 近世1』の編集作業が本格的に始まりました。これからは原稿の整理に追われる毎日となりそうです。今回収録する資料は、福岡藩主黒田家に伝来したものが多く含まれ、これらは現在、福岡県立図書館や福岡市博物館に所蔵されています。空襲による消失を免れたことだけでなく、内容においても非常に貴重なものです。

資料編という形でこれらの資料の一部を皆さんにご紹介することで、いまだ分からないことの多い黒田家や福岡藩についての理解をより深めるための一助になればと思います。

近世

江戸時代に作成された諸写本や、東京大学史料編纂所が明治、昭和初期に作成した影写本などを見ると、様々な事情により現在は散逸した中世文書が写されていることがあります。今年度刊行予定の『資料編 中世1』では、こうした情報を集めて、少しでも元々の文書群の伝来のかたちなどを復元することで、これまで知られなかった歴史的事実を明らかにしていきます。その情報集め・復元作業が結構大変な作業なのですが、できうる限りの成果をお届けできればと考えています。

中世

『特別編 福の民』暮らしのなかに技がある」の刊行がいよいよ迫ってきました。この特別編は、平易な文章とビジュアルな誌面で、皆さんにとって馴染みやすく、かつ日常のなかに新たな発見があるような内容を目指して作成しています。現在、初期から進めていた聞き取り調査とそれをもとにした原稿作成をほぼ終え、この特別編のもうひとつの主役である写真の撮影作業を行っています。自治体史というと難解なイメージを抱く方もいらっしゃるでしょうが、歴史は苦手という方でも、ぜひお手にとってみてください。

民俗

『特別編 福の民』暮らしのなかに技がある」の刊行がいよいよ迫ってきました。この特別編は、平易な文章とビジュアルな誌面で、皆さんにとって馴染みやすく、かつ日常のなかに新たな発見があるような内容を目指して作成しています。現在、初期から進めていた聞き取り調査とそれをもとにした原稿作成をほぼ終え、この特別編のもうひとつの主役である写真の撮影作業を行っています。自治体史というと難解なイメージを抱く方もいらっしゃるでしょうが、歴史は苦手という方でも、ぜひお手にとってみてください。

近現代

プログラムのトップは筑前琵琶保存会の演奏です。初めて聴いた方も多く、感動したとの感想も多く寄せられました。

民俗専門部会編集の映像資料「明治の博多 藝どころの風景」を上演。祝部至善の描いた博多の風景に、波多江五兵衛氏が解説を加えたものです。往事を思い出すとの感想も寄せられました。

第5回福岡市史講演会

そらおおごと!

— 福博藝能いろはにほへと —

平成21年9月19日、第5回市史講演会を早良市民センターにて開催しました。大盛況だった当日の様子をご紹介します！

- 上演** 筑前琵琶「衣川」(青山旭子作曲)
 - 尾方蝶嘉 / 青山旭子 (筑前琵琶保存会)
- 上演** 映像「明治の博多 藝どころの風景」
 - 福岡市史編集委員会民俗専門部会編
- 講演** 「川上音二郎と博多」
 - 講師: 長谷川法世 (「博多町家」ふるさと館館長)
- 上演** 三味線・唄・踊り「大榎上」ほか
 - 博多町人文化連盟
- 上演** 筑前琵琶「祝賀の曲」(萩野弘作詞・中村旭園作曲)ほか
 - 東旭秀 / 米村旭翔 / 内藤旭美 / 石橋旭姫 / 原口旭愛
 - 曲紹介: 中村旭園 (筑前琵琶 福岡旭会 中村旭園社中)

座談

「藝の力と福博」
 (パネラー)
 ・長谷川法世
 ・安田宗生 (熊本大学大学院教授)
 (司会)
 ・関一敏 (九州大学大学院教授 / 福岡市史編集委員会民俗専門部会会長)

(進行司会)
 ・重信幸彦 (北九州市立大学教授 / 民俗専門部会副会長)



講師の長谷川法世先生は、川上音二郎の活躍を当時の政治情勢から説き起こし、また博多の芸能について古代から現代にいたるまでの政治、経済、社会に目を配るなど、丁寧かつ会場の笑いを誘うユーモラスな語りで講演されました。



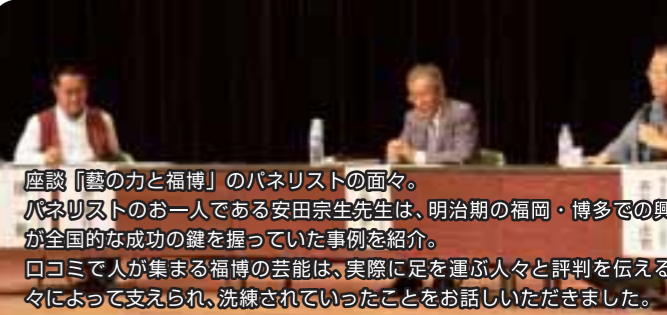
没後百年を経てよみがえる、川上音二郎のオッペケペー節に会場は大喝采。演者・演奏は博多町人文化連盟です。



筑前琵琶 福岡旭会による演奏。客席は演奏を聴くだけでなく、演奏に合わせて一緒に二曲を歌い、大いに盛り上がりました。



博多町人文化連盟による実演。にぎやかな囃子と華やかな踊りで舞台上に花が溢れるかのようです。



座談「藝の力と福博」のパネリストの面々。パネリストのお一人である安田宗生先生は、明治期の福岡・博多での興行が全国的な成功の鍵を握っていた事例を紹介。口コミで人が集まる福博の芸能は、実際に足を運ぶ人々と評判を伝える人々によって支えられ、洗練されていったことをお話しいただきました。



閉幕後のロビー。アンケートの回答ではほとんどの方にご満足いただけただようで、大変うれしく思います。

前回、昭和 25 (1950) 年 10 月に「福岡市史編纂に対する講想」が策定されたことを報告しました。これが最終的には現在の『福岡市史』全 19 巻となるのです。今回からはその事情を取り上げる予定でしたが、同じ年に、市史にとっても何かしら関連があると考えられる事績がありません。今回はこのことを報告します。

昭和 25 年 3 月 10 日付けで『福岡』が出版されました。B5 判のサイズ、ほぼ 400 ページの厚さで、少し厚手の紙表紙装、内容は自然、歴史、政治、経済、民生、文化、観光の各編から構成されています。執筆陣は大学・高等学校の教官、市および商工会議所などの役職者、マスコミ、作家、文化人等となり、今日から見てもそうそうたる陣容を整えていたと考えられます。発行所は福岡市役所図書室に置かれた『福岡』刊行会みよしやろくで、発行人は『福岡』刊行会長の三好弥六福岡市長、印刷所は福岡市役所共済組合印刷部となっています。お分かりのように、この出版物は福岡市が編さん・出版したもののなのです。

出版趣旨は正確には記されてはいませんが、序文によれば「最近十五ヶ年に於ける日本歴史の歩みは明治大正年間の五十年、旧幕時代の三百年にも匹敵する大変動であった。ことに終戦以来の最近五ヶ年間の諸変革は日本歴史にとっては未曾有の激しさと深さをもったもので、この変革は現に

尚しんしんとして動きつつある」と分析し、福岡の過去とそれに続く将来への意志ないし動向を見据えようとしたものです。歴史の変遷を中心に据えるのではなく、ここ数年来の経緯を概観しようとすることに視点があり、よくまとまった刊行物といえましょう。

さらに特異な点は協賛企業などのページがあることです。市の刊行物に時折見かけることはありましたが、今回は巻末に 23 ページにわたってスポンサーの広告があります。中間にも随所に印刷されていますが、あまり違和感はありません。モノクロ印刷時代の賜物かと考えられるし、表現に広告主も配慮したのかもかもしれません。出版に関する費用のことが編集後記にありますので、このことはそれが関係しているのかもしれませんが。刊行に関して一考できることかもしれません。

じつは昭和 24 年は市制施行 60 年に当たります。この年は特には記念事業が見当たりません。本書は春に企画が始まり、秋には出版の予定でありました。それが一年間ずれ込んだ結果となっていますが、本文中には市制 60 年目を意識した記述を見る事ができますので、多分に周年記念出版が意図されていたものと考えられます。したがって、この事業の中から「福岡市史編纂に対する構想」が策定されていったと考えて良いでしょう。

※前号の「福岡市史への歩み」では Vol.9 と表記しておりましたが、Vol.8 の誤りです。お詫びして訂正いたします。

表紙の写真

横山神社 (福岡市早良区脇山) 【写真: 新田岳 (cubicface)】

古くから背振山の三神が勧請されたので、江戸時代には横山三社宮、横山三社権現と呼ばれました。ここは、中世以前の東門寺領を管理する役所があったともいわれています。また「横山」という呼び名は、戦国時代の古文書に見ることができます。江戸時代中頃にも、「脇山郷」は「横山郷」あるいは「横山八か村」とも呼ばれており、写真にある鳥居の銘文からも、この神社が脇山を中心とした村人達の信仰を集めたことがわかります。

Editor's Voice

編集後記

市史だより Fukuoka 第 10 号をお届けします。今回の特集は早良区脇山～背振を中心にお送りしました。この取材のため、9 月と 10 月に花乱の滝や脇山、それに背振周辺などを訪れました。9 月はまだ残暑の中で滝や緑の涼しさを存分に味わえましたが、10 月に再び訪れた時にはすでに秋模様。空気も澄んで体感温度は涼しさを通り越しむしろ寒いほどでした。本誌をお届けする頃にはすっかり冬山へと変わっていることでしょう。

from: 市史編さん室